

## ◆書評◆

鈴木杜幾子編著

『西洋美術：作家・表象・研究』  
ジェンダー論の視座から』

(ブリュッケ 2017年 ISBN:978-4-434-23445-3 3500円+税)



味岡 京子

(お茶の水女子大学 基幹研究院)

本書は、2014年に編者鈴木杜幾子氏の明治学院大学定年退職を機に同大学において開催されたラウンド・テーブルに基づく論文集である。

本書の位置づけと意義を理解するにあたって、まず編者の立ち位置を確認しておく必要がある。きわめて専門性の高いフランス近代美術史研究によって業績を重ねてきた鈴木は、一方で美術史研究にジェンダー論の視点を導入することに尽力し、(ベテラン・若手を問わず)志を同じくする者たちのために発表の場を作り出し、その成果を世に送り出すという、いまだ保守的な日本の美術史界においてきわめて困難な試みを、根気強く、かつ毅然とした態度で行ってきた。本書に先立つ二冊の論文集<sup>1</sup>とシンポジウム<sup>2</sup>はそれを裏書きするものである。日本における本領域の研究は、高

い専門性と柔軟性を兼ね備えた鈴木の尽力により学術的位置づけを得たと言っても過言ではない。

先行の論文集・シンポジウムと本書が異なる点は、参加者が西洋美術史を専門とする中堅・ベテラン研究者に絞られている点、その中にジェンダー論的視点を従来示してこなかった者たちも含まれている点である。各々が専門とする領域において何かしらジェンダー的観点を導入するという課題が設定され、結果、本書「はじめに」でも記されているように、「専門性が高く、かつジェンダー論の基本的発想にも開かれた」論考が出そろったといえよう。美術史上の問題を考察する際、ジェンダー的視点を不可欠な要素として、それが中枢の論題ではなくとも常に意識することは、研究の専門性を害するものではなく、新たな可能

- 1 鈴木杜幾子・千野香織・馬渕明子編著『美術とジェンダー—非対称の視線』ブリュッケ、1997年。  
鈴木杜幾子・馬渕明子・池田忍・金恵信編著『美術とジェンダー2—交差する視線』ブリュッケ、2005年。
- 2 シンポジウム『西洋美術とジェンダー—視ることの制度』於明治学院大学白金校舎、2011年12月10日(『言語文化』第29号、2012年3月、明治学院大学言語文化研究所に所収)。

性を拓く契機になり得るといふ事例が示されており、これこそが本書の意図するところでもあり、この点において他に類を見ない意義ある書となっている。以下、各論考の要約を記し、最後に評者なりの意義と課題を述べる。

河本真理は、これまで日本であまり研究がされてこなかった「ロシアン・アヴァンギャルドの女性芸術家」に着目する。具体的にはナターリヤ・ゴンチャローワ、オリガ・ローザノワ、その影響下にあった男性芸術家アレクセイ・クルチョーヌイフが戦争をテーマとして制作した三冊の本を取りあげ、女性たちが同運動において果たした役割の大きさを見極めると同時に、著者が本領とする「断片化」の問題に鋭く切り込む分析を行った。

天野知香は、両大戦間期のフランスにおいて漆装飾家、室内装飾家、建築家として活躍するも一時「抹消」され、のちに「再評価」されるに至ったアイルランド出身のアイリーン・グレイを取りあげる。女性同士の「協力と承認」関係が創作を支える重要な要素であったことにも言及しながら、ル・コルビュジエが標榜するモダニズムをいかに彼女が差異化していったかを明らかにし、その今日的意義を提示する。

田中正之は、現代美術の「父」とも称されてきたマルセル・デュシャンが、女装をし、別人格となりその存在を演じたローズ・セラヴィの表象を、ジュディス・バトラーが『ジェンダー・トラブル』で提示した概念「パフォーマティヴな攪乱」を援用して分析する。果たしてデュシャンのそれは性差の境界を揺るがす可能性を持つ「攪

乱」となり得ているのか、否か。錯綜する問題に明敏な考察を加えながら、最終的に攪乱的であると結論づけてゆく。

岡部あおみは、米国における「アフリカン・アメリカンの」「女性の」芸術家、すなわち二重に周縁化された女性たちを論じる。地盤を築いたパイオニアたちの活動に言及し問題点を明確にしたのち、奴隷制時代の「タブー」を扱うことで成功を手にする一方で、倫理的側面から批判を浴びてきたカラ・ウォーカーを分析し、新たな位置づけを試みる。

馬淵明子は、西洋美術の造形的側面へのインパクトとしてのジャポニスムではなく、描かれた対象、とりわけ女性表象に着目し、先行のオリエンタリズムとの共通点が見出せるとして、両者を比較しその背景を分析した。ジャポニスムにおける女性像は、西洋優位の権力構造に裏打ちされた西洋白人男性の欲望の対象として生産消費され続けたオリエンタリズムにおける女性像の再生産であることが、明快に主張される。

木戸雅子は、「ギリシャとは何か（エリニコティタ）」の問いが、ギリシャ美術の領域において重要なテーマであり続けており、西欧が崇敬する理想の古代ギリシャなるものをいかに乗り越えるかが現代作家たちの課題となっていると指摘し、そうした中でジェンダー的視点をもってこれを追求するヴァナ・クセヌに注目する。ギリシャ性の探求が、同作家においては必然的に自らの「女性性」の探求へと連なり、そのことを通していかに西欧の重荷から解放された独自の表現をクセヌが見出すに至ったか

を解く。

鐸木道剛は、イコンの画家山下りんを取り上げる。イコン制作においては忠実な「模写」が理想とされるため、山下が手掛けたイコンもすべてが模写であり、よって様式による帰属は困難を極めるが、次第に強調される「眼」の表現に制作年決定の可能性があると文化的・神学的考察を行う。次に中世に遡り、イコン破壊論者の妻たちの連携によってイコン肯定が導かれた事実に着目しその背景を考察する。全体を通してイコンの「模写性」「物質性」と「女性性」との関連が示唆される。

金恵信は、他の非西欧地域で西洋美術史がどのように研究されているかという編者の関心に応え、韓国の大学組織の在り方や学会誌掲載論文の傾向を分析することでこれを論じた。おもに70年代80年代に欧米で博士号を取得した者たちが美術史学科創設期の指導にあたったため、ニュー・アート・ヒストリー系の新しい方法論を適用した研究が可能な環境が築かれ、それによって美術史研究における現代美術優勢の傾向も方向づけられたという報告は、日本との比較において興味深い。

鈴木杜幾子は、フランス新古典主義の画家ジャック＝ルイ・ダヴィッドの歴史画すべてに、男女の人物を「峻別し」「対比的」に扱うという特質が（女性不在の場合においてさえ）見出せることを証明し、それが来るべき近代国家の確立に不可欠な思

想として当時誕生した男女の役割分担の思想の現れであること、近代のジェンダー再編成にそれらが大いに貢献したであろうことを、美術の社会的機能に関わる重要な問題点として明示する。続く「女性たち」に関する考察が、当画家が啓蒙主義的ジェンダー観を確固として有していたことを裏付ける。

「おわりに」で、ラウンド・テーブル司会を務めた大原まゆみが、美術史研究へのジェンダーの視点導入の今日的意義と課題を述べる。

以上を通読して評者が気づいたことは、主軸となる論点は異なるが、分析過程において、たとえば（等閑視されてきた）女性同士の連携、男女における異性装の意味の違い、ポストコロニアル的視点とのリンク、地域によるジェンダー観の相違、男性「巨匠」と女性の関係といった、今後より深めていくべき重要な論点が、ジェンダーの視点を介して連携するように提示されている点である。必然的に複眼的考察が誘発されており、とりわけこの点で多様かつ有効な切り口を提供する貴重な書となっている。最後に、美術史研究へのジェンダー的視点の導入に市民権を与えるべく企図された戦略的な書として本書を見なすなら、道半ばでのこの一步を着実に繋いでゆく試みが必須である。課題としてこれを強調しておきたい。

（掲載決定日：2019年5月29日）